論文の内容の要旨

論文題目：Modernity and Nihilism: The Political Philosophy of Maruyama Masao and Karl Löwith
（丸山眞男とカール・レーヴィット―「近代」をめぐる東西の政治哲学の交錯）

氏名　：BALDARI Flavia
バルダリ・フラヴィア

本稿では丸山眞男（1914～1996）とカール・レーヴィット（1897～1973）における近代とその危機への思想を再検討する。本稿の主な関心は、異文化間の出会い、宗教を含む異国文化の思想の受け入れ方、そしてこれらの文化の相互関係や交錯（特に日本の「西洋化」を中心）をめぐる両者の論点にある。丸山とレーヴィットは、哲学的及び政治的立場から、社会における個人の位置を深く分析し、また、歴史過程の考察を通して個人の態度を深く理解しようとした。要するに、個人の政治的、歴史的意識の変化を観察することが彼らの主な営みであった。丸山とレーヴィットが当時の社会の中で見た特質のいくつかは、今日の現代社会にも存在しており、それに対する彼らの鋭い批評は、現代社会の解釈にも用いられる味深い視点を提供する。本稿が、丸山とレーヴィットの思想を比較するのは、両者の議論がいずれも近代化の意味とその危機を出発点としているからである。彼らが共有する多くの関心は両者のバーチャルな対話を可能にする。

レーヴィットはユダヤ系であったため、ナチズム支配のドイツを逃れ、1936 年から 1941 年まで日本に滞在し、東北帝国大学で哲学とドイツ文学を教えた。このことは本人の回想記などによって周知の事実となっている。日本での経験をきっかけに、彼の研究は、日本と日本の精神というテーマにまで射程を広げた。日本文化が、「世界」と「人間」の相互関係を発見したレーヴィットの研究が影響を受けた。本稿では、丸山のヨーロッパに対する思想と、レーヴィットの日本に関する観察が社会における個人の位置や個人の歴史意識という課題をいかなる相互関係を持っているかを明らかにする。そして、時間が経つと共に彼らの思想がどのように変化したかを検討する。

両者の近代批判は、政治的な側面を持っている点で共通している。特に、1930 年代の日本やドイツにおける軍国主義に多くの関心が払われている。そこから、レーヴィットのナチス批判と丸山の日本ファシズム批判における多くの類似点を見出すことができる。その中で本稿が注目するのは、軍国主義社会に生きている個人の意識、個人と国家の相互関係、そして個人におけるヒューマニティーの意味に関する両者の思想である。それを通じて、私的個人と公的個人の二つの存在側面が分離することができないことを見出せる。

しかし、両者の近代批判における「近代」を、一面的に捉えることはできない。近代化は、第一に、ヨーロッパと日本の異なるプロセスを経て、第二に、彼らが分析した「近世の人間」の相違を反映して生じるものである。従って、両者は近代化の違いを踏まえて異文化における個人的態度の相違や発展の相違を理解しようとした。異文化の発展に関して、レーヴィットの場合、約百年前に始まった近代化の結果を日本滞在中に観察し、ヨーロッパと日本における精神の違いに注目した。彼にとって「個人」は、ヘーゲルにおける弁証法と同様に「自己」から「他者」の立場に移行する過程、つまり自己の他者性のなかに自分自身をみいだす過程を必要する。しかし、彼が見た日本人は自己から距離を置くことが困難である。個人を独立した個人として考えることの難しさを指摘する点で、レーヴィットの議論は丸山の近代批判と重なるところがある。近代化の過程における日本精神に対する批判は両者の共有する課題の一つである。

近代の政治的意味において、私的な側面と社会的側面は密接に関係している。本稿の最初の発見は「合理的な人間性」という彼らの共通概念である。この概念によれば、個々人は判断する精神を持ち、国家の決定に対して批判的行為を行う。要するに、個人の主体的/内部的な側面と社会的/外的な側面の共存は人間に人間性を与えることである。日本のファシズムとドイツナチズムへの過程は異なるかもしれないが、丸山とレーヴィットが観察した全体主義国家における近代危機は合理的な人間性を関係している。全体主義国家では、私的な個人が弱体化し、個人が政治化する傾向が見られる。

こうした近代批判を踏まえて、本稿が明らかにしたいのは丸山とレーヴィットが近代危機を乗り越える上で必要とした共通の目標である。危機の克服に成功するため、彼らは同様の方法論で進める。彼らはまず歴史と伝統の分析を通じて近代の哲学的、政治的危機を理解しようとする。この過程で、レーヴィットはヨーロッパにおけるキリスト教が、丸山は日本における神話が重要な役割を務めることを強調する。そして、この歴史的な分析を通じて自らが批判した当時の状況を深く理解してから、危機の解決を試みた。彼らの批判論が類似しているのに対して、解決策に関しては、むしろ危機解決における議論の相違点に焦点に与える必要性がある。従って、丸山とレーヴィットの共通の目的でありながら、両者の思想がどの程度まで別れているかを検討する。

本稿は四つの章で構成されている。第一章では、レーヴィットと日本との交流を検討する。彼の思想は日本の文化の影響を強く受けたが、その点は欧州では十分に注目されていない。レーヴィットは日本に関する批判的立場を持ちながらも、1941 年に日本を離れた後も日本の文化を忘れていなかったことを示す。第二次世界大戦が終わってから、彼の関心は「自然」というテーマ、また、自然と人間の関係に向かう。この新たな関心は、明らかに日本文化の影響を受けた。明確に日本について執筆した三つの短い論文の他にも、レーヴィットは短いコメントを書き、日本に触れた。その後も、例えばニーチェの永劫回帰という概念を批判す

る際、日本の時間意識とそれを関連付けた。日本における滞在経験、日本人と日本著作との出会いは彼に深い影響を与えたのである。

第二章では、これまでの哲学的思考に対する近代哲学の新たな問いとこれに関する社会や政治にも注意を払う。ヨーロッパと日本の文化に近代化がもたらした変化を踏まえて、ヨーロッパと日本、それぞれの「近世の人間」のアイデンティティーを探求する。丸山の言葉を通じて、日本における明治維新後と前近代/徳川日本の断絶を理解し、政治的社会的体制や日本人のメンタリティの変化を指摘する。丸山によると、日本の「開国」は早いかつ挑戦的な近代化であった。彼は近代国家論における意識課題と伝統、特に封建制度とを比較しながら、日本の「上から」決められた制度がどのように日本人の個性に影響を与えたのかを議論した。そして、日本における近代化がもたらした危機とは対照的に、20 世紀初頭の近代ヨーロッパの危機についても議論する。また、科学の進歩が、哲学をどのように変化させたかを概観した。当時の雰囲気に関しては、ドイツの哲学者の作品を参考にして、哲学危機そのものついて語っている。本稿の最後では第三章と第四章の議論につながる技術進歩と歴史主義危機を説明する。

第三章では、ヨーロッパと日本におけるニヒリズムについて検討する。レーヴィットは、カール・シュミットとマーティン・ハイデガーを扱ってナチズムを批判する。レーヴィットは彼らが擁護した全体主義思想を対象に、彼らの思想におけるニヒリズムを強調する。そしてヨーロッパ文化におけるニヒリズムの議論に加え、日本精神論にまで議論を広げる。日本人は主体が欠けているという彼の批判は丸山と共通しており、それは丸山とレーヴィットをつなぐ論点である。丸山とレーヴィットは、日本のファシズムとナチズムの基本的構成の要素であるニヒリズムを個人の分析と個人と国家の相互関係に関連づける。丸山とレーヴィットは内的/主体的部分の弱体化からなる人間を見出し、そこから外的/政治的な部分が強化にする傾向を見出せると主張した。日本とドイツの軍事政権体制のような状況は、多元主義や個人の自由選択を奪い、社会は同質化する傾向を見せる。また、この章ではニヒリズムを分析する文脈の中に自己の意識を中心に置く。それは政治と関連しているのみならず、時間の流れの中でも検討されている。特に、丸山は当時の日本人における主体の欠陥（そして結果的に責任の欠如）を日本史の発展または日本人の歴史意識と結びつけた。レーヴィットもハイデガーにおける現存在とドイツ存在を参考しながら、ヨーロッパの精神に関連する時間と歴史認識を論じている。

第四章では、人間と歴史の関係との相互作用、そして第三章で触れた歴史意識の意味とその変化の分析を深める。レーヴィットは 15 世紀の間、ヨーロッパの哲学史に注目し、歴史意識における繰り返しのパターンを見つける。世界の宗教的解釈が衰えた後でさえ、ヨーロッパの文化は世界の摂政的指向という解釈に陥った。「進歩史観」は、依然として人間が世界の中心に置いているのみならず、世界は人間のために作られたという理解を生み出したとレーヴィットは主張する。レーヴィットによれば、ヨーロッパの文化は自然との絆を失い、世

界を「自然」として考えることをやめた。丸山も、日本の神話を分析しながら、日本文化における三つのパターンを見つける。このパターンは、日本人の倫理的、政治的、歴史的意識と関係している。この最後の議論は前の章で行われた分析と密接に関連している。しかし、第二章と第三章では、丸山とレーヴィットの思想の共通点について語ったのに対して、本章では彼らの相違を指摘する。同様の方法論を取る両者の議論が、最終的には分かれていくことを明らかにする。丸山は、日本の神話と理論的な精神観察を通じて、当時の政治的精神を取り上げる。それに対して、レーヴィットは政治的分析を離し、理論的エートスを目指す。

本稿の結論では、丸山とレーヴィット、それぞれの思想が生み出した結果を指摘しながら、彼らの相違を強調する。また、彼らの近代の窮状への批判やそれを解決しようとする試みを再検討する。